



四季の歌 恋の歌

古今集
を読む

大岡信

ちくま文庫



ちくま文庫

四季の歌 恋の歌

一九八七年四月二十三日 第一刷発行

著者 大岡 信 (おおおか・まこと)

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊟ 一〇二一九

電話東京二九一一七六五一 (営業)

二九四一六七一一 (編集)

振替口座六四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

© MAKOTO OOKA 1987 Printed in Japan

ISBN4-480-02125-6 C0192

¥460-

四季の歌 恋の歌

古今集を読む

大岡 信

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

筑摩書房

目次

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
四季の歌 冬 賀の歌 離別の歌 羈旅の歌 物名歌	四季の歌 秋 2	四季の歌 秋 1	四季の歌 春 3 夏	四季の歌 春 2	四季の歌 春 1	古今集の歌風と女性の力	古今集の撰者たち 序文	古今集の位置	古今集を読む前に
194	172	151	130	109	88	68	47	28	7

11 恋の歌 1

12 恋の歌 2

13 哀傷の歌 雑歌 雑躰 大歌所御歌

あとがき

解説 おのづから滋養が吸収される本

那珂太郎

217

242

264

289

293

四季の歌
恋の歌
古今集を読む

1 古今集を読む前に

文明の基本 子規の論難 鉄幹の自我の歌 郭公 水辺立秋
 曙覧の独楽吟 文明開化 子規より遠く 四季感覚 古今集
 の部立て 花橘秋月 季感紋切型辞典 恋の五楽章展開

古今和歌集をお読みになっているかなり大勢の方が同じような経験をなさっていると思いますが、私も最初、古今和歌集にいきなりとびついて、これは面白いと思ったではありません。むしろ万葉集とか、新古今和歌集に非常にひかれていました。

古今和歌集について話が出ると、すぐに話題にのぼることですが、明治の俳人で歌人であった正岡子規が古今和歌集並びにその代表的な歌人である紀貫之について、徹底的に批判し否定しました。明治三十年代のことです。その後その評価がわれわれの中に浸透して、古今集あるいは貫之というのはつまらないという見方が一般的になりました。

実は私も、そういう評価に、あらかじめ、いわば汚染されていたということがあったと思います。実際、古今集を読んでみて、たしかに子規がいうような意味で、万葉集に較べると、

ちよつと縁遠い感じがする。万葉集ならピンと意味がわかるようなことが、古今集だと、少し考えてみないとわからないようなところがあつて、とつつきにくいという感じがするので

す。

十代の終りごろ、万葉集と新古今和歌集と、この二つに触れたときには、非常に新鮮な驚きを感じましたが、古今集については、時期的にも少々遅れて読んで、最初のうちは、正直なところちよつと退屈であると思つたことがあります。しかしその後、ものを考えたり書いたりしているうちに、古今和歌集というものが、実はわれわれの文化あるいは文明というものゝを形づくるものの考え方の基本に染み込んでいるのではないかということに、気がついてきまして、今では、古今和歌集の大きさということについて考えることが多くなっています。

今日は、専門の学者ではないにもかかわらず、古今集について、これから十三回お話しするにあたつて、私がどんな観点から古今集を読んでいるかということ、いわば序論をお話したいと思います。

正岡子規が、古今集および貫之について批判した言葉は、有名な「歌よみに与ふる書」という、明治三十一年に子規が何回も連続して書いた文章の第二回目に出てきます。

「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有^{これあり}之候^{その}。其貫之や古今集を崇拜するは誠に気のしれぬことなどと申すものゝ、実は斯く申す生も数年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拜する気味合は能く存^{よんじまうし}申^{せん}候^う。」そういう書出しです。彼はかつては古今集というものが、いつでも歌をつくろうとする人びとにとって、手本だったので、

自分も一所懸命やったんだ、しかし最近になってそれがつまらないということに気がついた、三年の恋も一朝にして醒めてしまったということを行っています。

子規の古今集攻撃は、たまたま子規の時代の人々が、和歌というものについて潜在的に感じていた不満を、非常に見事に言い切ったというものでした。人々はたちまち子規の評価に領いて、古今集というものが、新しい時代の歌よみにとつては必要のない、また歌よみでない人びとにとつても必要のないものであるという考えが、一般的になったと思います。

子規より数年前に、やはりもう一人の有名な歌人であり、和歌の革新運動の一郭を形づくり、大きな影響力を及ぼした与謝野鉄幹も、明治の同時代の歌における古今和歌集風な歌の氾濫に対して、こういうものでは、新しい時代の自分自身の歌、つまり自我の歌というものはうたえないということをはっきりいっておりました。

正岡子規だけではなく、その当時の、新しく目覚めてきた歌人たちにとつては、古今集は、もう自分たちにとつてあまり役に立たない集であるという常識ができていたといつていいのです。

事実、その当時の無名の青年であつた人びとのうち、のちのち秀れた歌人や詩人になった人びとが、思い出のような文章で書いているものを見ても、自分たちにとつて、和歌なんていうものは、まったくお話にならないくらい古いものであつた。それを今さら子規とか鉄幹とかいった偉い人が、むきになって否定するのはどういうわけだろうと、むしろ不思議に思つたと言っている人もいるくらいです。

事実、その時代に支配的であつた歌をいくつか眺めてみますと、正岡子規とか与謝野鉄幹が、こんなものはだめだといって否定しようとした、その理由はよくわかるような気がします。

そこでまず、古今和歌集の歌風のいわば延長線上でつくられていた明治時代の歌のいくつかを紹介してみます。

例えば、明治十年に出版された『明治現存三十六歌仙』という本があります。実は私は、その本の実物を見ておりませんが、窪田空穂さんの書かれた「新派和歌の成立」という非常に秀れた論文がありまして、その文章の中で引用されているものがかなりあります。例えば、当時の歌人の中で、非常に勢力のあつた人の一人、三条西季知さんじょうしすもという人がいます。この人はお公卿くげさんです。尊皇攘夷を唱えて幕府に嫌われ、七人の公卿が長州に追放された七卿落ちという事件が幕末にありましたが、その時の七卿の一人です。宮廷の廷臣として重要人物でありましたが、同時に歌人としても有力者で、明治になってから、もちろん政界に復帰して、宮中における歌の指導者の一人になりました。

この人のつくつた歌で、こういう歌があります。「郭公ほととぎす」という題です。

めづらしといひし初音のちもなほ飽かれんものか山ほととぎす

ほととぎすというのは、古今和歌集時代から、たいへん歌人たちに愛された鳥です。この

鳥は冬のうちから春さきまでは、山のほうに籠っていて、初夏が来ると、夏を告げる最初の鳥として、麓へ下りてくると当時の人々は考えていたのです。その鳥の鳴き声を人びとは待ちがれていたので、そういうほととぎすがはじめて麓へ下りてきて鳴く。これが春から夏に移る季節の最初の合図と思われていました。ほととぎすの初音を聞くのは珍しい経験に出会う喜びを意味していました。

そこで、この歌ですが、ほととぎすの初音を聞いた、ああ珍しい、ほととぎすの初音が聞えたよと言いたった。でもそのあともなお、ちつとも飽きることがない、あの山ほととぎすの声は。こういう意味で、ほととぎすという、古い時代から愛されていた鳥を、改めてまた素材として持出してうたっているわけです。ですから古今和歌集の伝統に、そっくりそのまま添っている歌ということができます。

また、こういう人の歌があります。小中村清矩。こなかむらきよのり「水辺の立秋」。

澄むといふ空にかよへる水の上をけさよりわたる秋の初風

これは、非常にすっきりした歌ですが、格別新しい時代の歌というものではなく、やはり古今集的な、なだらかな、なめらかなよみぶりで、常套的な歌題である「秋風」をうたっています。「秋」の歌はまず「秋風」がたつところから始まるのが古今集以来の伝統でした。夏が去って今日から秋だという感懷を述べているこの歌、悪い歌ではないと思いますが、格

別新しい感じもしません。

もう一人、海上胤平うみかみひるという歌人がいて、この人も御歌所かうたどころという宮中の歌の中心をなす部門の重要な一人でした。この人は万葉集を非常に重んじたようですが、歌のスタイルは古今風で、雉子きじをうたった歌があります。

ほろ／＼とつばさこぼれて雨霞こせむ巨勢こせの春野にきぎすなくなり

これなども、雉子が、目の前にパツと現れた、あるいは雉子が目の前の草原を横切っていく姿にハツと驚いた、そういう目の前で雉子を見て感動した歌ではないのです。雉子の鳴き声を、雨に霞んでいる春の野原の別の場所で聞いているという風情で、目前に雉子を見ているのではない。雉子の声をやや遠くにふと聞いたということ、歌の本意としては、もののあわれ、趣、そういうものをしつとりと心の中に感じてそれを楽しんでいる。つまり眼前で雉子がサツととび立つというような情景をじかに写しとっているわけではありません。理想的な意味での美しいものとは何か、という観念がまず中心で、雉子に材料をとってそれを述べている。雉子が目の前を歩いていく、あるいは雉子が目の前からとび立つ、そういう驚きそのものを直接に写すのではなく、雉子というものを口実にして、春の、雨が霞んでいるような野原の趣ある情景をうたっているのです。これがつまり「古今和歌集」なうたいぶりなのです。

また、高崎正風たかきまさふゆという人がいました。この人も、明治時代に入ってから有名な歌人でしたが、この人の歌で、花見に嵯峨の大井川に出掛けたときの歌があります。

大るがは春もあらしのさむければ千鳥なくなり花かげにして

この歌などは、紀貫之の有名な歌、ただし古今和歌集にはありませんが、貫之の歌でこれだけは正岡子規も趣味のある面白い歌だといって褒めた歌、

思ひかね妹いもがり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり

の面影を写したものではないでしょうか。

「いもがり」というのは妹いも、恋人のところへということ、思いあまって、恋の思いに溢れてしまつて、自分一人では我慢できなくなつて、恋人のところへ出掛けていく。そのとき、自分が辿つていく冬の夜空の下で、川風が寒く吹いて、そこに千鳥が鳴いていた。冬に鳴く千鳥は、声だけ聞いてもますます冬の夜風が身にしみるような鳴き声なのです。貫之のその歌を高崎正風は、冬の歌から春の歌にしていますが、やはり千鳥が、春のまだ冷たい風の中で鳴いている。それが非常に趣があるという形で、いわば貫之の歌をふまえてうたっているのです。

こういう種類の歌が、明治時代にはたくさんつくられていました。こういう歌が、明治の宮廷を中心とする歌壇では正統派の歌だったのです。

こんな歌ばかりだったかというとはなく、ぜんぜん別のタイプの歌をつくっていた人もいました。ただ、その数は非常に少なかった。これは対照的に聞いていただくと非常によくわかると思いますので、一人だけ挙げますと、橘曙覧^{たちばなあけみ}という人がいました。この人も幕末から明治にかけての歌人では有名な人です。

この人の歌の中に、「独楽吟」という五十二首の連作があります。全部、「たのしみは」という言葉を頭に置いている連作で、たとえばこんな歌です。今までよんだ何人かの、主として御歌所に関係のあった、いわば上流階級の歌人たちの歌と較べると違いがよくわかると思います。

たのしみは紙をひろげてとる筆の思ひの外に能くかけし時

たのしみは百日ひねれど成らぬ歌のふとおもしろく出できぬ時

百日もひねっていたが、ちつともできなかった歌が、ふと、あるとき、面白い出来映えでできた。なんと楽しいではないか、ということですよ。

たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつゞけて煙草吸ふとき

これなども、ありのままをただうたっています。素直に頷かれる心理状態です。心に浮かぶはかないことを思いつづけて煙草をふかしている。ただそれだけだが、それが楽しい。

たのしみはあき米櫃こめびつに米いでき今一月ひとつきはよしといふとき

これはまったく生活そのものです。曙覧は裕福な生活をしていたわけではありません。何人かの子供もいましたし、その日その日のやりくりに頭をなやませる庶民の生活をしていました。米櫃にだんだん米がなくなってきた、ところが、お米がまた手に入った、あと一月はなんとかこれでもつていく、そのほっとした気分。

たのしみはまれに魚煮て児等こども皆がうましうましといひて食ふ時

説明する必要もない歌で、こういう歌も、幕末に、つくられていたのです。しかしこういう歌は、表向きの、歌壇の中心の歌風ではなかった。正岡子規は、橘曙覧の歌が好きで、こういう歌を称賛し、その返す刀で、先程よんだような人びとの歌風をやっつけました。これらの人びとの歌の伝統は、ずっと古いところからきていて、その一番根本は何かというと古今和歌集である。その古今和歌集の中心人物は紀貫之であるということ、古今和歌集と紀